

目的 前報に引き続き、消滅寸前の在来型労働着の中の職人の衣服をとりあげた。数十年前までの職人衆の制服ともいえる腹かけ・股引・はんてんは、現在ごく限られた人びとによってわずかに着用されているに過ぎない。しかし現在なほ在来型労働着を愛着をもつて着続ける人たちの思考性を求め、庶民の文化遺産ともいえるこの労働着の形態・構成・縫製技術・着装などを究明することを目的とする。

方法 厂史的な面からは文献・絵画資料を基にした。職人の業種は着用者として、とび職・いかだ職・壘職・植木職などの主としてクロオを越えた人たちをたずね、過去の実情と現在の実態を直接採録した。なほ技術面については明治初年本をはじめ裁縫教科書での教材を検討し、更に現在東京にわずかに三軒しかないといわれる腹かけ・股引・足袋縫い立処の技術保持の人びとから縫製の実態を知り、なほ農村労働着の同型のものについても比較考察を試みた。

結果 以上のことから在来型労働着として江戸期に形づくられた職人衣服には、時代の要求とその時代における彼等の生活の実態から生れ出た生活の知恵が結集されている。江戸末期までには「長物」と呼ばれた腹かけ・股引・足袋縫いを兼ねる職人たちは、かなり高度なカンによる技術で立体的な衣服を作るようになっていた。この仕立職人の技術が着用する職人の生活意識と要求に結びついたことが労働服としての機能を高める結果になったと思われる。